

| | |
|--------------|--|
| 開催地名：愛媛県八幡浜市 | |
| 開催日時 | 令和 5 年 1 月 20 日（金） 14：00 ～ 15：55 |
| 開催場所 | 八幡浜市民文化活動センター |
| 語り部 | 菅井 茂 （宮城県仙台市） |
| 参加者 | 自主防災組織・学校関係・社会福祉関係 125 名 |
| 開催経緯 | <p>当市では南海トラフ地震の発生が危惧され、発生した後の被害は甚大とされているため、八幡浜市自主防災会主催の八幡浜市防災訓練を毎年実施しているが、訓練参加者がマンネリ化しているように思える。</p> <p>そのため、今回、語り部の講演で災害発生時の自助、共助、近助の重要性を直に聞くことで、自主防災組織を中心に、市民一人一人の防災・減災に対する更なる意識向上と、災害時における避難所運営について知見を高めることとし、全市民が参加する避難訓練の実施に繋がりたいと考える。</p> |
| 内容 | <p>（１）大震災発生時の状況</p> <p>東日本大震災発生時、私は南材地区町内会連合会の副会長を務めていた。発災当日、打ち合わせで県内の鳴子温泉に滞在しており、帰宅途中の車の中で激しい揺れを体感した。それは車外に放り出されるくらいの、今までに体験したことのない大きな揺れだった。その後、地域住民の安否確認をすべく自宅近くの避難所へ駆けつけ、被災者の受け入れ、人数の把握に奔走することとなった。</p> <p>（２）指定避難所での運営</p> <p>地震発生後、私は南材木町小学校で避難所開設の準備をしていた。20 時前に水と乾パンを全員に配り、その際に 905 名が避難していることが判明した。避難者数は最終的には 1,200 名になった。仮設トイレを北側にも設置したが、寒くて誰も使用しなかったため、翌日に急遽東側に作り直した。また、自家発電機は 2 基あったが 1 基は作動しなかった。こうしたことも、日頃からのチェックが必要であると反省した。3 月 11 日の夜、避難所運営委員会を立ち上げ、役割を分担し、ボランティアを募った。その結果、若い人が寝ずの番でトイレ番してくれるなど、トラブルもなく運営できた。</p> <p>私は、3 月 13 日からは八軒中学校の避難所へ移った。こちらには 460 名の避難者がいた。津波被害を受けて孤立していた荒浜地区の荒浜小学校から、避難者の一部がヘリコプターで移送されて八軒中学校に入るようになったほか、南材コミュニティ・センターには乳幼児と母親が入所することになり、私どもは 3 カ所の避難所の運営に携わるようになった。避難所は避難した人たちのホームである。地区の代表者を係に決め、少しでも住みやすい環境を作るために、ルールを守れない避難者には退所してもらおうと伝えるとともに、希望や不満を伺った。</p> <p>振り返ると、避難者に対して避難所内の決まりごとを周知して、実際にそれらを遵守してもらったことが、トラブルもなく快適に運営できた要因ではないかと思う。具体的には、避難所内では「禁酒」、「禁煙」とし、避難所の起床時間は 6 時半、朝食が 8 時、夕食が 17 時として、1 日のスケジュールを明確化した。</p> |

また、八軒中学校合唱部は、3月19日の全国大会に出場予定であったが、参加できる状況ではなかったため、武道場で、父兄及び避難者対象に合唱してくれた。この光景が様々な形で報道され、辛い避難生活の中での明るい話題として心を和ませてくれた。

地区内で倒壊家屋はなく、主たる被害は断水だけだったので、帰れる方は帰宅して食べていただくようご案内した。また、ライフラインが復旧したら帰ってほしいとあらかじめお伝えしていたこともあり、震災が発生して10日後の3月21日には、津波被害を受けた沿岸地区の住民以外は、速やかに帰宅してもらった。

(3) 震災経験を踏まえて

避難所運営がスムーズに行われたのには要因があった。まず1つは、平成17年から地域で総合防災訓練を実施していたことである。平成19年からは避難所となった八軒中学校とも連携し、同校で防災訓練を行っていた。東日本大震災の2日前にも、同年の防災訓練について打合せをしたばかりで、避難所を開設したらどう動く、ということが頭に入っていた。さらに、地区の昔からの住民とマンション住まいの新住民が、小学校の諸行事を通じて互いに顔見知りになっていたことも大きい。こうした諸行事は、地域の人が出会う良い機会になる。震災後も、「防災訓練」にひと工夫して、様々な世代に防災の重要性を認識してもらうことをテーマに活動を継続している。学校には生徒の登校日に訓練日が重なるよう依頼していて、濃煙体験、防災クイズ大会、土のう造り・土のう積みなど、参加者の防災活動経験が増えるよう工夫している。防災倉庫で防災装備品が故障していないかのチェックも怠らない。コミュニティ・センターでは民間企業との連携も図って、協力を得ている。地道な活動が、ひいては「自助」・「共助」のありかたを見直すきっかけにもなるかと思う。



開催地より

「東日本大震災から学んだ自主防災」という演題で、発災後からの避難所運営や地域を巻き込んだ防災訓練の実施について、わかりやすくお話しいただいた。本講演を受けて本市では、自主防災会を中心とした地域を巻き込んだ防災訓練の実施、南海トラフ地震への家庭での備えの強化を進め、自助・共助の体制強化につなげていきたいと思う。